

令和7年度新宿区とうきょうすくわくプログラム 活動報告書



園名：新宿区立北新宿子ども園
施設所在地：新宿区北新宿3-20-2



活動テーマ『砂あそび』





1-1 活動テーマ

砂遊び

1-2 テーマ設定理由

北新宿子ども園には、自然豊かで広々とした園庭があり、これが自園の大きな強みとなっている。その園庭で日常的に触れる砂は、子どもたちにとって身近な素材であり、園庭遊びの中でも特に人気が高く、子どもたちは砂の感触や形の変化に強い興味を示しているという観点から、前述のテーマを実施することとした。

2-1 活動スケジュール

- 令和7年5月 講師研修1回目 職員ワークショップ
(講師から砂遊びの技法を学ぶ)
- 令和7年9月 プログラム1回目
(対象：1・2・3・4・5歳児クラス90名
保育観察・評価・反省)
- 令和7年11月 職員協議会
(活動写真からSTEAM分類・共有・考察)
- 令和7年2月 講師研修2回目
(各クラス活動報告と振り返り、
今後の展開検討)

3-1 活動のために準備した素材や道具、環境の設定

【砂場の砂】乳児砂場、幼児砂場共に購入した砂を入れる。新しい砂に存分に触れられるようにすると共に、従来の砂との比較ができるよう混ぜすぎないように配慮した。

【砂場玩具】土台の筒、コテ（大・小）、スプーン、シャベル、バケツ等を取り出しやすい場所に設定し、サンドアートが楽しめるようにした。

【水や自然物】葉、小石、どんぐり等を取り入れ、遊びが広がる環境を構成した。





0歳児クラス

保育者と一緒に砂に触れ、手でにぎったり落としたりしながら砂のやわらかな感触を味わうことから活動が始まった。砂遊びに少しずつ慣れてくると、手で触れるだけでなく、玩具を使ってすくったり混ぜたりと遊び方が広がり、砂が手につくことやこぼれる様子など、周りの環境とも関わりながら、同じ砂に何度も触れて楽しむ姿が見られるようになった。砂や環境とのやりとりを通して、一人ひとりが自分なりに遊びを広げていく様子を感じられた。

1歳児クラス

当初は、砂に触る・すくうといった感触遊びを中心にしていたが、次第に砂を容器に入れて運ぶ、型に入れるといった操作的な活動へと変化していった。更に、砂を料理やケーキに見立てるなどの要素が加わり、同じ砂遊びの中でも、繰り返しの操作を通して活動内容が広がっていった。「砂を使って何かを作る」活動へと展開していったことが特徴であった。

2歳児クラス

初めは、手やスコップを使って砂や泥の感触を楽しみ、入れる・出すといった基本的な遊びを中心にしていた。活動を重ねるにつれ、型抜きの方を覚え、砂を固めて形を作る活動が増えていった。更に、水を加えることで砂の状態が変化することに気づき、トンネルや線路づくりなど、目的を持って砂を扱う活動へと発展していった。感触遊びから、試しながら作る活動へと変化していった様子が見られた。

3歳児クラス

当初は、砂の感触や形の違いを楽しみながら、様々な砂場玩具を試して使う活動が中心であった。活動を進める中で、水や自然物を加えることで砂の状態や見た目が変化することに着目するようになった。次第に、道具の使い方を理解し、目的に応じて使い分けながら、大型の山づくりや見立て遊びへと活動が広がった。単発の遊びから、工程を意識した活動へと変化していった。

4歳児クラス

砂場玩具を使った型抜きや模倣的な遊びが主であったが、大きなバケツを使った構造的な遊びを取り入れることで、活動内容が大きく変化した。砂や水の量を調整しながら、お城づくりなどの構造物を作る活動へと発展し、試しては作り直すという工程を繰り返すようになった。個々の遊びから、複数人で協力して一つのものを作る活動へと移行していった。

5歳児クラス

これまで、砂山づくりや水路づくりなど、道具を使った砂遊びを行っていたが、活動を進める中で、作りたいものを事前に描き、計画を立ててから制作する取り組みへと発展した。砂だけでなく、水や他の素材を組み合わせ、目的に応じて使い分けながら表現する活動が増えていった。また、砂の性質そのものに注目した活動や、ごっこ遊びへと展開するなど、遊びの内容が探究的に深まっていった。





4-2 活動中の子どもの姿・声、子ども同士や保育者との関わり

0歳児クラス

保育者と一緒に砂に触れ、手で握ったり落としたりしながら感触を確かめていた。砂が手のひらからこぼれ落ちると、保育者の顔をじっと見つめる姿があり、「なくなっちゃったね」「どこにいったかな」と声を掛けると、再び手を伸ばして砂に触れていた。

砂が服につくと、保育者が「パッパしようね」と手で払う姿を見て、真似をして自分の服をパッパと払う様子も見られた。保育者と顔を見合わせながら安心感の中で遊びを繰り返していた。



1歳児クラス

砂をスコップですくって型に入れ、「アイスできたよ」と保育者に見せる子どもの姿があった。保育者が「一つください」と言うと、「はい」と手渡し、食べる真似をすると、顔を見合わせて笑っていた。そのやりとりを見ていた子どもが同じように「ください」と友達に声を掛ける姿もあり、模倣を通して遊びが広がっていった。バケツいっぱいに入ると、「これはケーキなの」と得意げに話し、葉っぱを飾って「まだつくってるからね」と完成まで大切に作る姿が見られた。



2歳児クラス

砂に水を少しずつ入れると、色が変わっていくことに気づき、「わー、くろくなった」と驚く姿があった。漏斗を使って砂を落とすと、「どんどん落ちてくるね」と友達と笑い合い、何度も繰り返していた。

砂山に葉っぱを立てたいがうまくいかず、何度もやり直す子どもに、保育者は「もうちょっとだね」と声を掛けて見守った。葉っぱの芯に気づき、差し込むときれいに立ち、「できた」と保育者を見る表情から、達成感が感じられた。





4-2 活動中の子どもの姿・声、子ども同士や保育者との関わり

3歳児クラス

プリン型や大型玩具を使って遊び、「こむぎこ（砂）をいれまーす」「シロップ（みず）がたりない」と言葉にしながらかーキ作りを進めていた。友達と声を掛け合いながら工程を楽しむ姿が見られた。

大型の山を作る際、近くにいた5歳児に「これであってる？」と尋ねると、「ここはどだいがだいじだよ」と教えてもらい、異年齢での自然な関わりが生まれていた。



4歳児クラス

「お城を作ろう」と子ども同士で声を掛け合い、役割を分担しながら取り組んでいた。「水入れすぎ」「トントンするといいよ」と意見を出し合い、「せーの！」と息を揃えてバケツを持ち上げる姿が見られた。

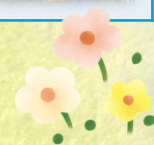
崩れてしまうと「あーあ」と残念そうにする子どもいたが、「もう一回作ろう」と気持ちを切り替え、再挑戦する姿から、試行錯誤する力が育っていることを感じた。



5歳児クラス

模造紙に「これを作りたい」と絵を描き、「ここは水があるね」「ぼく山つくる」と役割を決めて砂場で作り始めた。うまくいかないと、「水が少なかった」「押さえ方が弱かった」と原因を話し合う姿があった。

砂をふるいにかけて遊びから「研究所みたいだね」という声上がり、「白砂研究所」と名付けて遊びが発展した。「この砂はさらさらです」と説明しながら友達を招く姿に、探究する姿勢が見られた。





5-1 振り返り 振り返りによって得た保育者の気づき

0歳児クラス

砂に触れること自体が、子どもにとって大きな経験であり、手で握る、こぼれる、つくといった一つの出来事を、全身で受け止めている姿が見られた。手の平の砂がなくなると保育者の顔を見つめるなど、安心できる大人との関係の中で再び遊びへ向かう姿から、共感的な声かけや関わりの大切さを改めて感じた。日常の関わりそのものが遊びの一部となっていることが分かった。一人ひとりの感じ方やペースを尊重しながら関わることで、短いながらも主体的に砂と関わる時間につながっていた。

1歳児クラス

「すくう」「入れる」「運ぶ」といった繰り返しの経験が、次第に料理やケーキなどの見立て遊びへとつながっていく様子が見られた。保育者とのやりとりを通してイメージを持ち、その姿を見た友達が真似をすることで、遊びが自然と広がっていった。保育者が子どものつぶやきや行動を言葉にして受け止めることで、「やってみたい」「伝えたい」という思いが育ち、友達との関わりを楽しむ姿につながっていたことに気づいた。

2歳児クラス

砂に水を加えることで起こる色や固さの変化に気づき、「こうしたらどうなるだろう」と試す姿が多く見られた。うまくいかない場面でも、すぐに手を出すのではなく見守ることで、自ら気づき、工夫し直す姿が引き出されていた。自分でやりたいという気持ちが強い時期だからこそ、援助のタイミングを意識することの重要性を感じた。試行錯誤の積み重ねが、子どもの達成感や自信につながっていることを改めて実感した。

3歳児クラス

友達や保育者とイメージを共有しながら、言葉を使って遊びを進める姿が多く見られた。砂や水、道具を「ごっこ」の世界に取り入れることで、遊びがより立体的に広がっていた。異年齢児との関わりの中で、大きいクラスの子どもから教えてもらう場面もあり、自然な交流が学びにつながっていることが分かった。道具の使い方についても、試しながら理解を深めていく姿を大切に見守る必要性を感じた。

4歳児クラス

共通の目的に向かって友達同士で声を掛け合い、役割を分担しながら遊ぶ姿が印象的だった。崩れてしまう経験を「失敗」と捉えるのではなく、「次はどうする？」と再挑戦する姿から、考える力や協力する力が育っていることを感じた。保育者が環境を整え、必要な時にのみ言葉を添えることで、子どもたち自身が考え、解決しようとする姿につながっていた。

5歳児クラス

作りたいものを事前に描き、イメージを言葉で共有した上で砂場で表現する姿から、計画性や振り返る力が育っていることを感じた。崩れた理由を話し合ったり、素材や作り方を工夫したりする姿は、探究活動としての深まりを感じさせた。「白砂研究所」など、遊びに名前を付けて発展させる姿から、砂という素材を通して、STEAMの視点につながる学びが自然に生まれていることを実感した。

